特36
574

誠教訓蒙 敬神道の話 全

013975-000-4

特36-574

敬神道之話（誠教訓蒙）

默 真人／著

M27
ABB-0222

誠教訓蒙敬神道の話全

特36
574

誠教訓蒙 敬神道之話

目錄

仁

仁は人の安宅なり
なさけは神の心なり

義

よの中をわたりくらべて今はしる阿波の鳴戸は波風もなし
貧富によりて心をかふるなかれ

禮

よの中の人はなともいはゝ水清み濁るをば神ろしるらん
貧賤のものをあなどることなかれ

智

學ばざれば牛馬に同じ

明治三十年

智識は心の食物なり

忠

大御心を心として國の爲につくすべし

身のために君を思ふは二心君のためには身をも思はじ

信

時間を正しく守るは信なり

朋友の間柄

孝

人の子の親になりて子我れやの思はいとゝ思ひしらるゝ

孝は大悪人をも化して善人となす

悌

兄弟和合は家のつよみなり

兄は弟をいたはるべし

誠教訓蒙

敬神道之話

默眞人著

○仁は人の安宅なり

よの中に なにが いちばん つらいか と まをしましたら 貧はどつらいものが ございません かと ぞんします 貧やへに 人の道を ふみはづし 貧やへに つみを れかします サテモ なさけないのは 貧です わるいと しりつゝ ぬすみでゝろを 起したりいとしかわい子を 氣のしらぬ人手に わたして 奉公さしたり いのちを つなぐ米も 麥も かふこと が できず 寒さをしのぐ きものさへ きることが できなんだり 一人まへの 義理交誼も できませなんだり 人はみな 正月じや ぼんじや まつりじや と いふてきらくろうに あろんで ねるのに さむさも あつさも かまはずあめにぬれ かせにふかれ 日にやかれ あせみづ 滴して はたら

ひて　今日はと　いふて　くらす日も　ないのは　貧ぼへ　で　ざりませんか　しんるいの　あいだがら　も　悪くなり　夫婦げんくわも　多分は　貧ぼへで　ございましやう　この　いやな　貧を　誰がこのんで　なりましやう　しかるに　いやな貧乏に　なります　のはよく〳〵　の　ことが　あるからです　から　貧乏な人を　あはれみたすけて　やらねば　なりません　愛といふ心をだして　貧乏な人をたすけて　やらねばなりません　愛！情！　神の心は　愛です　神の心は　なさけです　なぜ貧となつたか　何如なる過から　貧となつたか

とふに　れよびません　愛を　れてなふのに　人のかれこれを

いふに　れよびません　併し　人を　たすけるにも　よくかんがへねば　なりません　いかに　愛とは　まをしながら　どろぼうが　あつて　塀をのりころふ　と　して　ねるのを　みて　アア　きのどくな貧ぼへに　ぬすみするか　塀を　のぼるのに　こまるで　あらうと

いふて　はしで　を　かしてやりましては　サッパリ　むちやです　てんな　ことは　愛では　ありません　しかし　ろんなこと　を　なさる御方も　ございますまい　が　何に　いたしましても　なさけ　といふことを　わすれて　は　なりませぬ　主人の心がけによりて　飼牛や　馬や　犬まで　が　れとなしく　なり　又　あらくなる　と　いふことを　或伯樂に　きいた　ことが　ございます　が　ものいはぬ牛馬の　たぐひ　さへ　愛の心の　しみわたる　ことは　ひどい　もの　です　孟子も　仁者人之安宅也　と　申され　ました　なさけ　をかける　のは　決して　自身の爲に　するので　ございません　けれども　神は　すてれき　たまはず　必ず　ろれだけ　の　報を　さづけて　下さるのです　むかし　支那に　孟嘗君と　いふ　人が　ございました　この人は　齊といふ　國の　王様の子　で　ございます　して　よはど　はつめいな　御方です　其時分　は　戰國と　申まして　齊

のような　大きな國が　七つでございまして　いつも　いくさが　つゞいて　われこそ　旗頭に　ならう　と　れもひ　辯舌のたつしやな　ものや　軍學の　ひいでた　ものや　學問の　ゑらい　ものの　など　一藝に　秀て　よくできる　ものは　皆　用ひられて　孟嘗君の内　なんぞ　では　三千人ばかりも　かゝへて　でざりまして　誰一人　れろか　なものは　でざりませなんだ　或日のことに　ての　孟嘗君の　ところへ　一人の　眷高い人が　參まして　孟嘗君に　あいたい　と　申ました　ソコデ　孟嘗君は　この男を　客間へ　引入れ　まして　來意を　問ひます　と　其人が　申ますには　私は　馮諼と　いふものですが　尊君が　人を　かゝへ　なさる　と　きゝまして　御厄介に　なりたい　と　ぞんじまして　參ました　と　申まして　孟嘗君は　いかにも　拙者は　士を好みます　から　多く　かゝへて　れきます　が　あなた　は　何を　よく　なさります　見れば　立

派な　御仁体で　長い　太刀を　はいて　でざる　ところを　見れば　御力が　つよく　劍法を　よく　なさる　と　見へます　ろれで　なければ　軍學か　文筆が　御達者です　かたゝしは　忍術か　碁か　音樂か　と　申ました　が　馮諼は　只　イヽエ　イヽエ　と　イヽエの　一點ばり　です　孟嘗君も　いろ〳〵　と　問ひましても　下手です　不得手　です　といふ　ばかり　ですから　孟嘗君も　チト　變に　思ひまして　申されますには　ソンナラ　あなた　は　何を　よくなさる　の　です　何に秀で　て　でざる　の　です　かと　問は　れました　馮諼の　申します　には　ショウデス　先づ　わたくしの　人にすぐれた　事と　申ますは　何事も　人より　劣る　といふ　事です　何もできぬ　の　が　すぐれて　ねます　の　じや　と　申ました　孟嘗君　も　コイツ　面白人　とれもひ　かゝゐて　やる　ことに　致しました　國王の　御親族　で　何不足の　あらう　はづ

は　ございませぬ　けれども　打つゝく　戰と　多くの人　しかも　三千人　ばかり　も　かゝへて　ある　もの　です　から　手許が　よは　ども　つまつて　きました　孟嘗君は　兼て　薛といふ　ところの　人民へ　金を　かして　ございり　ました　勿論　戰國の時代　です　から　人民も　不如意　で　借金を　返す　どころか　利息さへ　納め　かねる　ありさま　です　塗炭の苦　とは　これを　いふ　ので　ございます　田は　ふみにじられ　商賈は　できず　されば　とて　食は　ず　飲まずに　日は　くらされず　戰といふては　谷に　かくれ　野に　伏し　山に　にげこむ　ことも　あります　孟嘗君　も　夫を　知らぬ　では　ございませぬ　けれども　今　内所の　不如意で　背に　腹は　かへられぬ　と　使を　やつて　貸金の　さいろく　を　いたしました　が　薛の　人民は　なかなか返され　さうな　筈が　ございませぬ　から　すつたの　もとつた　の　と　申まして　返しませぬ　ッコで

是は　一通の　さいろく　では　返す　まいと　思ひ　武勇すぐれた　人々を　やり　ましたが　人民も　いろいろ　と　日延をねがひ　ます　けれども　往きました　人等は　己の　武勇力量　をたのんで　是が　非　でも　とりかへさねば　れかぬ　といふ　擬勢を見せて　きびしく　さいろく　いたしました　から　薛の人民　も　今は　もはや　死武者　です　鼠も　始は　猫に　追はれて　にげます　が　とても　のがれぬ　とき　には　猫に　かみ付きます　即　薛の人民は　猫に　追つめ　られた　鼠も　同じこと　で　返金するは　さてき　やぶれかぶれ　じや　とて　命も　れします　手むかひいたしまた　なか〳〵　命を　ほつて　やる事です　から　ひどい　勢で　す　如何に　武勇すぐれた　士でも　命の　れしまぬもの　は　ございませぬ　から　この　死武者の　ものに　かつこと　は　できず　はふばふの体で　にげて　返ります　薛の人民も　役人を　れひかへしま

した から 必ず ひどい 咎を うける で あらう と 思ひて んで 孟嘗君の使と 聞くと 一生懸命 よせつけぬ よふに いたしました 又 孟嘗君 の 内 で でも 誰一人 私が 往かうと いふ ものが ございません 三千人の人 を 抱へたのも 斯いふ時 には はたらひて ほしい から ですソレに 薛人 の 勢にれろれて もかう と いふものも なく また もきましても 死なずがひの 目に あふて かへります から 人々 みな れろれて 薛と 聞くと 戦へると いふ ありさま で 誰一人 往うと いふ者 が ございません 孟嘗君も こまりまして 誰も 薛へ往かうと いふ人 は ないか と 心を くるしめましたが 其時 かの あかぬ名人 の 馮諼が 私を やつて 下されば 往きましやう と 申て 出ました 孟嘗君の よろこびは 如何で しやう 孟嘗君は 大きに よろこび 萬事 御前に たのむから よろしく 頼

ひ と 申ました 馮諼が 申ますには 度々 使を やりましては いろ〳〵 と 入費も かゝります から 今一度に みな 取て 返りましやう ろして 其金で 何を 買は しやり ますの です 何なら ついで に 買て かへりましやうか と 申ました 孟嘗君が 申ますには 何を かふて よいか 分てございませう 自分の内に 不自由な ものを かふて來て 下さい と 申され ました コレは 私の内 の 不自由なものは 言ふ迄もない 金じや から 金さへ 持て返れば よい と いふ心です 馮諼は 承知しまして 一人の供も つれて 薛の人民の 借用證文 を 大きな 長持に 入れ其を以て 薛へ まゐりました 薛の人民は 又もや 金催促の使が くる と 聞きまして 一泡ふかして やらう と 力んで をりました 馮諼は 一人の供人と いつの間に やら 薛の城中 へ 這入て 人民の ようす を 伺ふて ねました 又 薛の人民 は 今

度は どんな人が 來るか しらん 定めし 多勢の勇者を ひきつれて 來るで あらうが 又 一泡吹かせて やらうと 手ぐすね 引て 待て居りましたが 二日たてども 三日たてども 來さうな 樣子も ござりません から 勢も 張も ぬけて しまうてまちくたびれ ました ろの中に 馮諼は 薛の勇者 八九人 とらへて 役所へ つれかへり 申すには 己は 孟嘘君の御内人 馮諼と申すものじやが 薛の人民へ 申聞かす事が ある ゆへ 一人も不參なく 此所へ 來るやうに 申せ 又 此方の申すことに不服のことが あれば 後にて もるもると きいても やらうから とくと 聞た上で この馮諼を 斬るとも 殺すとも せよ 譯も 仔細も きかず 理不盡に さわぎたてる ときは 互に 損あつて 益ない事じや から 汝等を とらへたのも この 道理をいひ聞かせて やりたい から である 夫じやに よつて この

地の 人民に 役所まで れと おしく 來るやうに しらせよ 若しさもなければ 此座を 去らず 斬り捨つるが 如何じや と 申ましたら 囚者は かしこまり ました きつと 仰の通りに いたします と いひまして 詐僞のない 樣子です から すぐ 繩を 解て返して やりました サテ 翌日に なります と 薛の人民は みな城中へ あつまりました 馮諼は 束帶裝束して 正面へ 出で 蟻のように 群がる 人民を きつと 見廻し ました 人民は みなしづまり かへつて 今 馮諼が 何か 言はふと する ことを 聞かふと いたし ました 馮諼は この有樣を 見まして 大音聲に申ます に は 薛は 孟嘘君の 領分で あるから 薛の人民は みな 孟嘘君の 子も 同然じや から 薛の人民 の なんぎを 餘所事に 見て 居られぬ から 皆のもの へ 御手許金 を 貸して 下さつた が 戰國の習 として 如何はど 御富豪の 孟嘘君

でも　御不自由な　ことも　ありがちの　ことじやから　時に
よつて　は　御催促　なさらぬ　ともいへぬ　ソレに　薛の　汝等
は　理不盡にも　腕力を　振ひ　粗暴な行　をすると　は　まこと
に　以の外の事　じや　しかし　これも　人民が　貧より　起ること
と　思召して　いかにも　不憫な　事じや　と　思召て　かしたる　金
を　取り立てる　ところ　かこの　馮諼に　薛へ　往て　よきように
はからへ　と　仰られた　ソレで　自分も　孟嘗君の　御仁徳に
感じ　薛の人民が　よき君　を　持てゐる　に　感じ　思はず　なみ
だ　をこぼし　即　只今　この　御主意　を　申きかす　ことで
即ち　貸金は　みな　下さるぞ　と　云て　長持　一盃の　證文を　讀
み上げて　は　火に　くべ　讀では　火に　くべ　一つも　のこらず
焼て　しまい　これで　汝等の　借金は　皆　濟だぞ　と　申ました
又　薛の人民は　又もひどい　催促に　あふこと　と　思ふて　居ま

したが　馮諼の言葉　を　聞き　この　有様を　見て　思の外のこと
ばかり　夢かと　思ふ　ほど　喜んで　皆一同　に　かしら　も　得
上げず　難有涙を　こぼし　ました　馮諼は　人民を　皆　返して　用
事も　すみ　ました　から　歸りました　孟嘗君は　馮諼が　只　一人
の供　を　連れて　參りました　こと　もへ　首尾よく　金を　受けと
つて　返る　か　如何だか　と　案じて　居られました　ところ　へ
馮諼が　返て來た　との　知らせに　早速　馮諼を　呼び入れ　何を
買て來て　くれたか　と　申されました　馮諼が　申ますに　元利共
のこらず　取り　まして　ござりますが　サテ　御内の　御不自由な
もの　を　かへ　との　仰ですから　御内を　見ましたら　廐には
立派な馬が　あり　御庫には　いろ〳〵の　珍しい　寶物や　いろい
ろの　けつこうな　道具は　澤山にあり　其外　衣類　食物　何一つ
御不自由なもの　は　無し　あれ　でも　なし　これ　でも　ない　と

いろ〳〵考へましたが これは品物ではないと考へ付きまして仁！愛！全くなさけといふものを買ふて來よとの御思召ぞと思ひまして即仁を買ふて參りましたと申ます孟嘗君は變に思ひナニ仁を買ふて來た？仁？仁を!? どんなものだ幾金だ？と不思議相に怪げんな顔つきをして馮諼を見つめられました馮諼は落つき拂つて眞顔になり左樣です、仁といふものは形のないものです・ろの仁を買ひますには取た金皆入用ましたしかし、これが仁ですと申して御見せ申すわけにはまねりませんがたしかに仁を買てかへりましたから御安心下さい御内の御不自由なものは仁ですから仁を買ひましたと申ましたから孟嘗君は問はれますに其形もない仁を如何して買ふたかと申されました馮諼が申

ますに貸金の證文を薛の人民の目の前で一枚ものこらずやきすてましたコレが即仁の買ひやうですと申しました孟嘗君は何のために馮諼を薛へ遣りましたか又馮諼は何のために薛へ使に往きましたか勿論の事！金を！貸金！金を取り立てに往きましたのに一文の錢も受とらず剩さへ證文を殘らずやきすてたといふことを聞いて喜ひましやうか孟嘗君はうれしがりましやうか若しあなたがたが貸金催促に人を頼んでこの馮諼のようなことをして返りましたら如何でしやう？御よろこびなさるか御立腹なさるか多分は御立腹なさるでございましやう孟嘗君も馮諼の言葉をきゝ大きに腹を立て小言八百いひならべましたを申ますけれども孟嘗君の心はなか〳〵たちつきません

しかし すんだ こと を いくら いひ ましても しかたが
ございり ませず まさか やきすてた 證文 を も一度 書かせる
わけにも 參りません から ろの まゝ に なつて しまい まし
た 仕合なは 薛の人民 です サテ其後 孟嘗君の身に せまつた
難儀 が できて 來ました 餘のこと では ございません 孟嘗
君 を 攻めに 來ました ので 孟嘗君の いのち を とりに 來
ました のです ろの とき 馮諼は 孟嘗君に 申ますに 今ころ
私が 買ふて れきました 仁です 仁が 御間に あひます サア
早く 薛へ れにげ なさい と すゝめて 薛へ 孟嘗君を にがし
ました 薛の人民は 孟嘗君 が 今 敵に 攻められて 逃げて
ござる と いふこと を 聞き 吾一に 御迎ひに 出で よろこび
いさんで 後前に つき したがひ かゝへぬ斗りに いたわり な
ぐさめ ました ろの有樣 實に なにとも たとへられぬ ほど て

野も山も 草も木も よろこびの聲に なりひゞき ました 孟嘗君
は 今 この有樣に かんしん して 馮諼に 申され ます には
今ころ 仁の難有さが わかつた と いふ て 大に 喜ばれました
薛の人民は 身をも 家をも 打忘れて 守りかしづき 敵を ふせ
ぎ 戰ひ勝て 敵を しり そけ ました から 孟嘗君は ついに
薛公となり 何不足 なく あんらく に 其一生を 過ごされました
と いふ ことで ございます いつはり の はかりごと を 尊
び 切たり はつッ たり いたします 戰國の世で さへ 仁愛の
とく は この通りです から 神の御國に 生れ 神の敎を 守る
吾々信者は 仁愛といふ心を わすれて は まことに 面目次第も
ない こと では ございり ません か

○情は神の心なり

世の中には 人の なんぎ して ねる とき に つけこんで 今こ

ろと いはぬ ばかりに 色々の事を して 吾身の 得を 取らふと する人が ございますが まことに これは 最 にくむべき しわざで 不仁の 甚しいもので ございましやう こふいふ人は 利益と いふことを 第一番 好きものと 思ひ 仁愛 情といふことは 物數寄の する 仕業で 慾も 得も 知らぬ 愚な人の することと 自分勝手な 道理をつけ 生爪はがしてもとくを つかまうと 致します人が ひろい 世間には いくらも ございましやう こんな人々は 神の御心に かなひ ましやうか 神様は こんな人々を 御好み なさり ましやうか 否々 決して 神様は こんな人を 御好き なさり ますまい 必ず これを 罰して 肉のくるしみか 心の苦を 與へられる で ございましやう 昔 天明三年の ことに 信州の 東さかい に ある 淺間山が 破裂して 關東へ 灰を ふらしました ことが ございます

すると これより 四五年の間 地震やら 旱やら つゞき まことに 踏だり 蹴たりの 有様で ございました 即 今も 話に のこつて ある 天明の大饑饉 です 即 天明七年の春頃 から 米の價が 高くなり まして 初の間は 百文で 白米 六合がへ でしたが だん〳〵 高く なり 今日は 五合じや イヤ 四合じやと いふ ように なり 遂には 三合に なりまして ろの百に三合の 米さへ なか〳〵 容易に 手には入りませぬ ほど です 麥 大豆 粟 など は 勿論のこと 諸式何によらず 値が高く なり ました 米問屋の 人々は 今ころ 儲にやならぬ と 各自 思ひ 思ひに 手くばり して てゝ かして の 米を かひしめて 賣出し ません ろうしますと 外の 仲買や 小商人 までも 皆 まねをして 利に利を 取らふと いたしました から 今日よりは 翌 翌よりは 明後日 と 米相場の

あがるのを見合て有ても品切れといつはりなか〳〵容易にうりませぬから其日暮の人は勿論の事少々ものけのある家でも困りまして野へ出ては竹の實とか大事前の葉とかいろ〳〵の草や木の芽をつんで食べましたがしきになくなりました細民の難澁いふもれろかで哀れや露命をつなぐによしもなく手を束ねて死をまつより外はございません竈の中には蜘が巣を張り下櫃の上には一寸ばかりも埃がつもつてあるといふ有様ですしかし一日や二日は食はずに心棒も出來ましやうが久しくはこらへられませんから貧民の血氣なものは米屋の狡猾なを怒つて二三十人よりあつまりあばれ出ました尤ですあばれ死に死ぬか食はずに死ぬかどちらにいたしましても死ぬのですから一層のこと思ふ存分あばれてやらうと決心したのです其心根はまことに不便なことではございませんかサテこのときに大阪の内平野町に長濱屋伊左衛門といふ商人がございまして隨分内福でございましたから召使も數多ございました こんな世間に數多の奉公人を置くも如何として通常の人ならば奉公人に暇を出し口を〻へらす工夫をいたしますがすべての人の情ですが伊左衛門はなか〳〵暇を出すどころかみなあはれみを加へ施を好みましたが家へ出入する商人が不景氣のため夕方まで売らずにこまつてゐるもの何でもかでも値段の高い安いを論せず殘らず買ふてやりました大飢饉大不景氣のときには儉約してなるべく金のいらぬようにしまつするのはすべての人情ですのに伊左衛門は全く反對ですから即伊左衛門の思

ひます には 平日ならば ともかく こんな折に 儉約を して は 其日其日 を くらしかね て ねん出入の 商人が なんじ ふ する ことは きまつて ある からしまつは 出來ぬ 出 來ぬ と いふ 心から サテこそ もたかに いたしましたの です 人氣のよい 金の よく もうかる時に あれも 買へ これ も 買へ と いふて 金錢を 湯水のように つかひます はす べての 人情ですが 伊左衛門の このしかた と ぞちが よろしい か 能く 御考へ なさりませ ソシテ 伊左衛門は 町 内の 難澁者 は 無論のこと すべて 貧苦なものに 米や 錢を ほどこして やつたり 物參り など いたします ときには 常も 金を ふところにして 道すがら まづしい と 見る人の かど を 通るとき には 立より まして 腰をかゝめ 申しますに は 今年は 私の 祖父の 年回に あたります もへ 不しつけな

こと ですが 少しの物 を あげたい と ぞんじ ます ぞう ぞ とつて れいて 下され と いふて ろの家の ようす によ りまして 或は 二分 三分の 金を つゝみ 扇子に のせて はど こし ます 若又 其名前を 聞かれる と イヤ 名前など 申すや うな 者 では ございませぬ どうぞ れ取りれき 下さりますれば 本望です と いふて 名前は いはず 若強て とはれる ときは にげてもきます この よふに いたします こと 二 三年も つ いき ました が 家内の者にも 誰にも いひませぬ から 誰も しりませ なんだ が 天知る 地知る で ろのことが 誰いふ と なく 幕府へ きこへまして 大ろうな 御褒美を もらわれ まし た 其時 役人の 問はれ ます には 其方 諸人に はどこしを する が それは 全く子孫 は はんじやう の ため かたゝし は 其身の 果報に と 思ふて。 かと 申され ました が 伊左衛

門の申すには これは六ケしい 御尋 まことに 恐入りますが 何と 御答申して よろしいやら 只 難澁な人 を 見ます と どうも 痛はしさ に 思はず 知らず 出過たこと を いたし 子孫のため とも 吾身の爲 とも 一向 其こと には氣も 付かず ツイ 致しました ことで 別に どうして こうして と 申すような 考も なにも ございませぬ と 申されました 伊左衛門の この言葉 其心を とふ に 及びません 千萬無量の 味がございます…… 痛はしさに 思はず知らず 與へました…… アヽこの心は 神の御心で ございませんか 情の 至極した ものでは ございません か 吾々が 今日 御亙に 無事に くらして 居られるのは 神の御恵で ございませんか 神に 祈るのは 神の 御めぐみ を いのる ので ございません か 神様は 大な 口にも 言にも つくされぬ 大きな 尊い 御めぐみ を 下さり ましても 報を 御求め なさりませぬ 報の 有無を論せず 只 愛……情を かけます のは 即 神様の御心 です 吾々 信者は つとめ はげみ ましして 神様の御心に かなふ ように いたしき ものです 又 人に より ましして 情は ものもちの する こと じや と 申す方 も ございますが 決して 決して ろんな こと は ございません 力相應に できるだけのこと を いたしますれば いかなる 人 でも できぬ ことは ございませぬ

○よの中をわたりくらへて今はしる

阿波のなるとはなみかせもなし

阿波の鳴戸は 日本の海中 で 第一 れそろしい ところで 大鳴戸 小鳴戸 と いひまして 海の中に 大きな渦がまひて ございます もし この處へ 船が 近づきましたら 一も二もなく すひこまれて 幾百尋 あるやら わからぬ 大海の ろこ へ 流れ込み ま

す　誠に　れろろしい　ところで　ございます　が　ろの　阿波の鳴門も　浮世の　れろろしさ　に　くらべて　見れば　なみも　風も　ない　ように　思はれる　と　いふのです　何故に　この世の中が　阿波の鳴戸より　も　れろろしい　か　と　申ますと　人の心が　ねこの眼玉　の　ように　かはります　から　れろろしい　の　です　阿波の鳴戸　は　れろろしい　ところに　ちがひない　の　です　けれども　は　じめから　ろの用心を　致します　から　何とも　ございません　が　人の心は　外から　見へません　ろで　眞綿に　針を　つゝんだ　よ　うに　まんぢう　に　ぢく　を　いれたる　ように　表邊を　善く見せ　て　中に　れろろしい　たくみ　を　もつて　ねる人　の　ないとも　かぎりません　ろれで　大惡人でも　言を　やさしくし　にこやかな顔　を　いたしましたら　ッィ　油斷　します　ろの油斷してる間に　よて　あい　から　つきとばす　よふな　わるい事を　いたします　から　阿

波の鳴戸　よりは　人の心　が　れろろしい　と　申ますので　世の諺　に『人はぬす人型は雨』と　思へと　いふ　ことが　ございます　が　この歌やこの諺　は　至仁至慈なる　神様の教　を　まもる人の　心得　として　は　甚だ　よろしくない　ことです　から　ろんな事を　思　ふて　は　甚だ　神に　對して　すまぬ　ことです　が　かなしいて　と　には　此　うき世の中　の　人に　この歌　この諺が　ぴつしり　と　あたる人　が　ないこと　は　ございませぬ　ィヤ　まことに　た　くさん　ございます　家が　はんじやう　して　あるとき　に　旦那様　御内室さま　と　いふて　何の用事　も　あいのに　出入して　居ま　して　も　すこし　れちぶれ　て　來ましたら　出入も　自然に　うと　くしく　なり　終には　其所に　居るか　とも　申ません　又　しん　るい　の　間柄でも　かなり　に　くらして　ねる　間は　盆じや　祭　じや　ねの子じや　と　いふて　互に　往き來も　いたします　が　れ

ちぶれて　來ます　と　何と　申しますか　と　思へば　そのやうな
見苦しい裝　して　親類じや　の　たばじや　の　と　出入して　くれ
て　は　奉公人等の　手前が　わるい　どうぞ　こんど　來る　なら
裏の路道から　這入て　くれ　なぞ　申まして　今まで　心よく　つき
逢ふて　居た　ものが　ころつと　打てかわつて　不付合です　これ
です　もの『よの中』の　歌が　ありますの　です　ろういふ　こと
になる　も　皆　欲といふ　悪魔が　はびてる　から　です　吾身勝
手の　よい事　ばかり　を　思ふから　です　私の考へ　ます　には
難澁な親族の者　が　たびたび　出入　いたします　の　は　其家に
取ては　喜ばねば　ならぬ　こと　で　あらうと　ぞんじ　ます　何故
か　と　申すれば、蟻の集まつて　來るの　は　甘い物が　あるから
で　難澁人の　集まるの　は　はどこし……めぐみ　が　あるから
です　しんるいの　難澁人に　やるだけ　の　甲斐しようが　ある

から　施を　受けよう　と　して　出入するの　です　ものよろこん
で　世話せねば　なりませぬ　夫に　あんな　親族が　あるか　と　云
はれる　が　面目ない　といふ　のは　誠に　其心が　しれません
此所に　最も　義のかたい人　の　はなし　を　いたし　まして　其人
を　したい　ましやう　いつの頃　の　事でありました　か　武藏の浦
和に　對ひ合せに　住まつて　居る　清左衛門　遠十郎　といふ　二
人の百姓　が　ございましたが　二軒とも　相應に暮して　居りました
この　清左衛門　に　多三郎と　いふ　一人の子が　あり　遠十郎に
れ禰といふ　娘が　ありました　この　遠十郎と　清左衛門　とは
向ひ同士　の　事でも　あり　殊に　碁友達で　兄弟のように　親し
み交はり　ました　多三郎　十才の時　或人の　すゝめ　により　れ
禰といふ娘を　いひなづけ　に　いたし　ました　然るに　多三郎　十
五才の　をり　病に　かゝり　まして　はじめ　は　ひせんの　よう

にかもみをれば へましたが一年斗りの中に ようすが
かはりましてかみの毛がぬけ肉の色がかはりなにとも
いへぬできものが出來ました醫師は首をかたぶけて申ま
すには これは不治の……不治の癩病じゃと見たてまし
たサテ月日のたつにつれまして肉くさりうみ流れて二
目とは見られぬありさまで今までは玉のような美少年も
今は蕚のようになりました両親もいろ〳〵心配して良い
と いふ事何一つせぬではなけれども其甲斐もなき
難病に困りはてて居りました向側の遠十郎夫婦もいろ〳〵
心配して毎日毎日訪ひ慰めは致しますが三年餘の久
しい間よろこばしい事もござりませぬ又遠十郎の娘れ福は
年一年と年の立つにしたがひましてきりようよくな
りますからその母親は娘の容貌よくなるのを見ます

につけ夫が早まつていひなづけしたことを悔みまして
夫遠十郎をうらみ毎日毎日小言をいひますイヤ十一位
の時に何もいひなづけせぬかといふてもよいことに良
人も良人なら又あのやくざ老爺も老爺じゃ賴みもせぬ
事に出しやばりいらぬ世話してあのような蕚を見たような
男にこの可愛らしいきりようのよい娘をいひ名づけの
なんのと何故まア やくろくをしたやらとろれはろれ
は聞ても居られぬ程やかましく小言を申ますが遠十郎は
又かと思ふて口やかましい女房にとりあいませぬが
何分向同士の家居でもあり又いらぬ告口する人もありま
してツイ清左衛門の内へきこへました清左衛門は温順柔和な
人でござりますから遠十郎の女房の小言いふことをき
〻まして其はまことに尤な事じゃ無理はないといふて

翁の許へ　往き　申ますには　悴も　あの難病　で　とても　人がましい　交際も　出來ませず　又　れ福は　勿論　かの両親の　思はくも　あらう　のに　知らぬ顔　して　あつかましい　いひなづけ　とは　情にはづれた　人非人と　思はれも　しやうか　と　思へば　どうか　破縁のこと　を　いふて　くれ　と　申ました　翁も　氣の毒とは　思ひます　が　致方もない事　です　から　遠十郎方へ　其由を　申込ました　ソレを聞た　遠十郎の女房　よろこぶの　よろこばぬの　何ぞ　飛び上らぬ　ばかり　に　よろこび　ました　娘れ福を　呼び　この事　を　言きかせました　が　れ福は　喜ぶと　思の外　れちついた容子で　申ますに　燕は　二つの夫を　もたぬ　と　申すこと　を　或先生に　聞たこと　が　ございます　鳥さへ　二人の夫　を　持ませぬ　の　に　況て　萬物の長と　いはれる　人間で　ありながら　二人の夫　持　つようでは　燕にも　劣ると申すもの　夫故　かならず　貞節　操を

守らねば　ならぬ事と　思ふて居ます　のに　今更　破縁して　他の　夫を持て　とは　母様の御言葉とも　思はれませぬ　若又　破縁して　外の夫を　持つような　こと　を　いたしまして　は　私は　燕にさへ　笑はれましやう　母さまの　御言葉に　背きます罪は　ふかい　でも　ございましやう　が　これだけ　は　御仰に　從ひかねます　何卒　御ゆるし　下さいませ　と　申まして　なか〳〵　聞きません　若し　強て　勸めたら　變なことでも　いたしかねぬ　ようす　です　から　口やかましい　母親も　これには　一番閉口　しました　遠十郎も　破縁と　思定めて　ねましたが　娘の言葉に　親耻かしい　はゞ　感心して　直ぐ　翁のところ　へ　往まして　破縁の事　不承知のよし　を　申まして　やはり　もとの　通り　にして　もらひたいと　申ました　翁は　中人役に　又この事　を　清左衛門へ　申ました　清左衛門は　これを　きいて　れ福の心掛の　善いのに　感心して　喜びは　喜び

ました　もの、　の　其では　どうも　蕾の花を　散らすも　同然　誠に
心ない致方　もへ　破縁　破縁　どうぞ　破縁に　して　もらいたい
と　申ましたが　翁が　いろ〳〵　すゝめます　から　清左衛門　異
論の　あらう筈　は　ございませぬ　から　破縁の話は　立消になり
ました　まこと　に　寸善尺魔の世のたとへ　彼此いふて　居てはよ
ろしく　ない　と　申しまして　吉日を　ねらひ　婚姻の式を　いたし
ました　れ禍は　かひ〳〵しく　多三郎の　膿血に　よごれた着物ふ
とん　を　洗ふこと　は　申までも　なく　多三郎の氣を　慰むるよ
うに　いたはり世話　いたします　ことは　なか〳〵　年は　もも
かぬ　女の　所作とは　思はれぬ　ほど　でございましたが　多三
郎は　れ禍が　甲斐がひしく　世話する　有様を　見るに　付けても
思ひます　に　迚も　全治らぬ　この難病　見るさへ　いやになる　此
吾を　きたない　とも　むさい　とも　思はず　せわして　くれる　其

心根は　有難が　生甲斐も　なき　この身が　有る　ばかりに　操を
立て　て　花あり　實ある　貞女をば　苦しめる　と　いふもの　ソレ
にして　も　何たる因果で　この身は　又　こんな　病にかゝつた　や
ら　この身さへ　無きもの　と　ならば　れ禍も　亦　良きゑん　もと
めて　仕合に　この世を　過しも　しよう　ものを　吾身もへに
父さへ　母さへ　れ禍さへ　苦しめると　は　罪ふかい　仕業！　と
思ふに　付け　つい　死氣に　なりました　ソコデ　醜き容貌を　笑
はるゝ　と　まゝよ　家を出で　或藥種屋へ　もきまして　毒藥を　か
ふて　かへり　常時よりは　殊に　きげんよく　翌は　吾が　誕生日と
や　から　赤の御飯を　炊て　くれ　と　申し　いろ〳〵　と　話を
いたしまして　吾亡きあと　で　良縁　もとめ　身の幸福を　求めよ
と　ろれとは　なしに　申して　をりました　サテ　翌日には　早くも
赤の御飯も　出來ました　から　一銚子の酒さへ　添へて　多三郎の

前へ すへ ましたが『砂糖を』との 注文に れ福は 立て 砂糖を とりに もきました 多三郎は この間に と 昨 買ふて來た 毒 藥を とり出し あはただしく 銚子へ入れ ふり動して 湯呑茶碗に つぎ込 ぐッと 呑ました 又 れ福は 多三郎か 砂糖を求め ま す に 何となく ろわ〳〵して 落ちつかぬ 樣子を 變に 思ひ むしが知らす か ろの坐を 立ちかね ましたが 疾疾 といは れる ま丶 ッィ 起つは 起ちました ものの 氣が丶りでな りませぬ 故に ふすまの外 からのぞいて 居ましたが この樣 子 を 見て 驚き 跳び込んで 今 御飲あろばした ものは 何で す 何か れかしな 粉藥の ような ものは あれは 何ですと 急込で 問ました 多三郎は 隱すに 隱されず 眞實の決心 を 告げて 申すに もはや 飲で しまつた から もう しかたが ない から 吾なきあと は 良き緣 もとめ て ヨ と 申まし

た れ福は うらめし相な 顏を して 居ましたが ろんなら 私も ……と いひさま 銚子を とり 口に あて丶 殘りの酒 毒藥の 入た酒を 飲ました が 暫しますと 毒が 廻つた か 二人が 二人とも 大きに苦み もがき ました この有樣に 家内は 大そう どう です 間もなく 醫者が來まして ろれぞれ 手あて を いた しましたが 二人とも 多く 血を吐き まして どうやら 命に 別條ない 樣子です が 不思議や 多三郎の難病は 一月餘で あら ふが 如くに すつかり なをり ました ろれから 多三郎も れ福 も 一層 達者に なりました と いふ こと です 膿や血で 蓋 のように なつて 見さへ いやな 男を 年少の 女子 が すきま しやう か ならんで座る だけ でも いやがる もの を まして 夫として 一生涯 つれ添ふ事は よはど 六かしい ことで あり ませんか れ福の よふな 人ころ まことの人 で 神慮に かな

ひ　御助けを　得たもの　か　と　存じます

○貧富によりて心を二つにすへからず

世に名高き　大忠臣なる　菅原道眞公の　讀み玉ひし　歌に『あはれ吾愛き今までの友もなき人のなさけは世にありし頃』とて　とかく　人情が　輕薄で　今はと　時めいて　ある時には　ちやはや　とも　てはやし　少し　れちぶれ　て　來たときは　尻むけて　砂かけぬ　ばかりになると　いふ　ことを　なげかれ　ました　歌で　千年前の人情も　千年後の　今日の人情も　變りない　なさけない　人の心誠に　歎かはしい　ことで　ございません　か　今は　むかし　文政の頃　伊勢の國　川崎村　に　江戸屋と　いふ　百姓が　ございました　が　主人は　養子で　一人の男の兒　か　ございまして　其兒の名は　橋彌と　申ます　が　この　橋彌　三才のとき　に　何か仔細　あつて　乳が　不自由です　から　乳母を　やとひ　橋彌を　育てゝ　居ま

した　家は　元來　可なりに　暮して　居たのです　けれども　主人の心得方　が　よろしく　ない　から　借財も　出來　必至と　なんとうになりました　左樣ですから　諸道具は　いふまでも　なく　田畑山林　何に　かぎらず　金になり　ろうなものは　何によらず　賣代して　仕方を　いたしました　が　借金は　なか〳〵　なくなりませぬなくなりましたのは　江戸屋の身代　です　女房は　貧苦を　苦に病で　病死し　あとは　さつぱり　しかた　ない　ように　なり　村方へも　いろ〳〵　厄介かけ　申分なく　已を得ず　主人も　祖母も　何處へか　姿を　かくし　ました　跡に　のこつた　ものは　年はも　も　かぬ　橋彌と　乳母と　二人です　如何に　苦しい　とは　いへ　獨よりない　しかも　幼き子　を　れいて　身をかくす　とは　如何なる心　でしやう　鬼とも　蛇とも　申されぬ　心ではござり　ませぬ　か如斯人は　人は惡かれ　吾よかれ　で　わが身さへよくば人は如何で

も かまはぬ と いふ 心で でざりましやう 先祖代々 住みなれた處を 去り 相應な身代 をつぶす のも 尤な次第です 乳母は 今 この年 もかぬ 幼兒を 置き去られ まことに 氣の毒とも 何とも 云へぬ事 ですが 其を うらみも せず れこりもせず 甲斐がひしく 幼兒を せわしろだて ました この 乳母と 申すは 同國の五反田村の 百姓の娘で 奉公に 往きました 當期しばらく は 給金も もらひ ましたが ろの後 主家の 不如意に つき 一厘も もらひませぬ 勿論 乳母奉公する位 の 者は 皆 給金はしさに 奉公も いたします の ですから 給金も 貰へぬと ころ へ 奉公さしても 置かれぬ と いふて 親里からは かへれ かへれ と 申ます けれども 更に かへりさうに でざりませ ん 夫は 何故かと 申せば 主人の不心得から 困究に なり 主人 も 祖母も 心がけの よろしくない から 何道 この家は つぶれ

る にちがひなし と 見込ました から 橋彌が 不便で ならず 日に日に かわいらしく なり 乳母や 乳母や と まをします に つけ 見すてゝ かへる ことが できませぬ ッコで この乳 母は 自分の衣類を賣り ろの代金を 貰ふた 給金のように して 折々 親里へ 送て 居ましたが 今 主家の破滅 に なりました から 何でも かでも 橋彌を もり立て 江戸屋の家を 再興しやう と 決心 致しました 實に 大膽な企で ございます ろの折 乳母は 三十歳で 容貌は 十人並の容色で 又 盛すぎた 年 でも ございませぬ から 嫁に來よ 妻にせん と いふものも ございます が なか〳〵 承知しませぬ 何がサテ 田舍で 年頃の女 が 只獨 住居すること ですから 心弱くて は かなはず 又 人に 疑はれて なにとか かとか いはれる も 口惜しい と 思ひ 齒を染めぬこと 髮にあぶらを つけぬこと 元結 丈長紙 など

でかみを いわぬ事と 心に ちかひ 一心に 志をはげまして
橋彌を 育て ました 勿論 村方へ 厄介かけた 江戸屋のことで
すから 家再興は チト むつかしい ですが 頼母子講に かけ
て あつた 金が 幸にも くじに あたりました もへ めうがの
爲 やら 村方への 詫代金と して 金五両と 銀拾匁 差出しま
して 家名再興のことを 願ひました 誰が『ろれは ならぬ』と
申ましやう 村役人を はじめ 村中の人等は 皆 ろの志に かんし
んいたしまじて 皆 世話して やりました 尤 家やしきは 主
人が居ますときに 疾に 人手に 渡つて ございました から 身を
れく處さへ 有ませんが もとの やしきの 隅に 小さい 小舎
が ありました から 其處へ 引うつり ました 他人の田地 五
反ばかりを 預て 橋彌を 育てながらも 田を耕へし 肥物を
荷なひ 草刈り 虫とり 何事を論せず 農事と いふ 農事 一切

人手を 借らず 一人して 働きました 其艱難辛苦 なか〳〵 申も
れろか で ございます 夜は 夜なべ に 時のうつる も 知ら
ず 朝は くらがり から 起きて 東の白ひ時分 まで 草履を つ
くり ちと 暇ある間 には 縫針 貫機れり すゝぎ洗濯 などし
て 只 橋彌の眷丈 のの のびる のを 楽みに くらして 居ました
が 光陰矢の如く 月日に 關守なければ 橋彌も 早 十才に な
りまして 乳母の手助 を いたします 十歳といへば わるさ盛り
ですけれども 育てる人 が 育てる人 です から 悪戯を い
たしませぬ 兒供の悪い のは 育方が よく ないから です 口や
かましい 人の子は やはり 口やかましい 兒が ございます サテ
乳母も 橋彌の大人しく 成長し まことに れとなしい すなを
なで 骨折がひ が あつて よろこび益〳〵 精出して はたらき
ました ソシテ又 この乳母の 親里には 文五郎と いふ これも

十歳ばかりの兒供がございました　卽ち　橋彌の乳母の實の子ですろの兒も　川崎村へ　呼びよせ　橋彌と　一所に　寺子屋へやり　讀み書き　算用など　習はせ　ましたが　ろれも　唯　一年餘りで　松阪へ　奉公に　やり　又　江戸へ　百の海山　隔りたる江戸へ　奉公に　つかはし　ました　橋彌も　よき友　得しとよろこびましたも　僅　一年餘　まことに　別を惜み　ましたがいろ〳〵　いひなぐさめ　ましたこれは　實の子　を　側に置てろだてゝは　自然と　主の子　橋彌を　疎略にするかも　知れぬろれでは　すまぬと　いふ　心から　肉身わけし　實の子を　百里外の　江戸三界へ　奉公に　やりました　のです　燒野の雉子　夜の鶴子を　思ふのは　凡ての親の心で　匍匐は　起て　起てば　歩めと　吾年の　長けるのも　わすれて　かわいがるものを　胸のせまい　氣の小さい　涙もろい　女の身で　獨より　なき　實の子を

百里の外　なる　遠い處へ　奉公に　出しました　時の　心の内は いかゝ　で　ございましやう　凜々しく　旅裝束して　行く　吾子の後姿　見送つた　ときの　心は　如何で　ございましやう　斯る　悲しつらい　ことを　もれしきつて　致す　其志！　何と云て　はめたら　よろしい　でしやう!?　私は　何とも　いひようが　なひと　思ひます　親が　親なら　子も　子です　すなを　に　奉公にもきました　乳母は　十八年の間　一日のように　橋彌を　育て　吾身は　黍せん　只の一度も　親に　めい　わくかけたり　心配さしたりしまやひへのような物を　たべ　橋彌には　相應な物を　食はせ兒共は　れ母ア　れ母ア　と　いへども　吾身は　主　家來の心得を失はず　まことに　男はづかしい　位ですが　この眞心　が　と いき　まして　橋彌　二十一歳の時　には　大分　金が　出來ました から　大きな家をたて　小介　一人　召使い　田も　一町四五反　作

り　先に　家出した　彼人非人の　祖母も　さがし出して　養ふ　やう
に　なり　ました　この事　領主　石川家へ　きこへ　多分の御褒美を
もらひ　ました　又　がの　江戸へ　奉公に　ゆき　ました　實の子
文五郎も　心妙に　奉公し　主人の氣に入り　のれん分て　もらい
立派な　商人に　なりました　ろうです　ソシテ　この　女丈夫の名は
登世　れ登世さん　と　いふ人　です
○世の中の人は何ともいはゝ水
すみにでるをは神ぞ知るらむ

こゝに　二つの　土の球　が　ござりまして　一の球は　其中に　水晶
の玉が　入れてあり　マ一つの球は　心から　土ばかりで　ござりまし
て　ろれを　二つ　ならべて　見ますれば　大きさは　同じく　土
の色合は　同じく　丸さも　同じことで　ございます　から　其目方
は　少し　違ひ　ましても　知らぬ人は　どちらも　皆　同じ土玉

じや　と　思ふに　ちがひ　ございません　よもや　水晶の玉が　入
てある　と　いふ　こと　は　知りません　ひよつと　しましたら　其
球を　こしらへた　本人さへ　まちがへる　かも　知れません　又た
と　へ　水晶の球が　入てある　と　いふこと　を　知て居ましても　手
にとり上げ　重さを　さげ　くらべ　たり　いろいろ　して　みませぬ
ば　一寸見た　だけ　で　は　どちらの球に　水晶が　入てある　と
いふこと　が　わかりかね　ます　が　しかし　其球を　作た人は　ど
ちら　の　球に　水晶が　入て　あるか　どちら　には　ないか　と
いふこと　は　知て居るで　ござり　ましやう　即　二の土球の　良否
を　知て　居る　もの　は　土球を　こしらへた者　より　外に　ござ
りません　然るに　他人は　これを　知りませぬ　から　此球は　圓々
として　ある　から　此中に　入てある　イヤ　こちらの球じや　と
いふて　うはべ　だけ　を　見て　何とか　彼とか　申ますが　即　相

馬以皮と いふて 上べの 皮や 毛なみを 見て 良い馬じや 悪い馬じや といふも 同じことです 早い話が 今 私が ぼろ〳〵した 衣服を着 むさくろしい帶を しめて 知らぬ人の所へ 往きまして 私は 何の某と 申すもの どうか 天理人道に つき 御話申たい と 思ひます から 御邪魔を いたします と 申ましたらソレは ソレは ようころ 御越下さりました イヤ かしこまりました と いふて 丁寧に あしらふて 下さりましやう か 大概は皆 見すぼらしい 風体を見て 心の中に 思ひますに この薄きたない 奴が 天理人道の話 馬鹿な！ 大山師が 何にせよ 素手では 去ぬまい 十錢やらうか 五錢 やらふ か と 思ふに ちがひ ございません か と 存じます イヤ 時に よつては 一も二も なくことわられる か も 知れません が もし 立派な衣服を まとひ 供の一人も つれ きんぴかぴか と 時計のくさりを きらつ

かせて 往ましたら 人間には 別に かはり は ございませぬけれども まづい風体 して 居ました時と 同じ あしらい を しられ ましやうか まさか 追ひ出されも いたしますまい 或は 鄭重な待遇を 受ける かも 知れませぬ 今 神の御前に 額ついて 一心不亂に 祈りを して 如何にも 慎み敬うて 居るようで ありましたらば ろの心の中の 良否は 他人から 見られませぬ故 至極の敬神家の ように 見へます ろこで 多の人の中 に は 外面うはべ ばかりの つゝしみ を して見へを かざる人 が 多分 ございますが しかしながら 先に 申ました通り 球を作た人 は 球の良否を 知て 居ます ように 人を作たもの は 人の善悪邪正を 知て居る 人を作たもの は 誰です？ 何者ですか？ 神では ございませんか 即 神様は 人を御作り なされた 御方です から人の良否は 心から 底から 能く 見通して 御座るの です 決して

上べの つゝしみ位に たまされ は なさりません 皆様は のみを 知て 御座るで しやう 彼奴は 頭だけ たゝみのへりの間へ かくして 尻を出して ろれで 充分 うまく かくれた と思ふて 居ます 自分の頭が へりの間へ かくれて 目が見へぬ からだれも 見へぬ と 思ふて 居る 丁度 吾耳を ふたして 鈴をぬすむ 愚盗と れなじ ことで 人目をつくらふ 虚信神は ろれと 同じたぐひ でござりましやう 故歌に よの中の人は何とも いはゝ水すみにてるをば神ぞ知るらん と 詠で ございます 外面の虚禮を 笑ふた歌で うはべの慎や 禮義は 何にも なりません 心からの 敬が なければ しかた が ございません しかし 心で敬ひ 心でつゝしみ ますれば よい と いふて 禮式を れろかにし 畏多くも 我 天皇陛下の 御尊影に對し 敬禮を いたしませず 世間から 色々 非難しられた 耶蘇信者が ございました

が これは チト まちがふた 心得かと そんじ ます 心で 敬へば 敬になる なら 心で 食たつもりで 居ましても 實際 口に食物を 食べません ければ 腹が へります 總体 何によらず 物には 体と 用との 二が ありまして 体ばかり でも いけず 用ばかり でも いけません 体と用と 備はらねば 片輪車も 同じて と で 何にも なりません 用とは 敬の行 体とは 敬の心です このように に 申せば 用と体と 別々のように に 思はれます 御方も ございましやう が 二つでは なくて 一つです 丁度 人の手の ような物で 左とか 右とか 只一本だけ では 片手です かたわ です 右と 左と 二本 ろろは なければ 滿足な手 と は 申されません 体と用とが ろろひ ませねば 滿足な 敬禮と いふ ことが できません それを 能も 考へずして 虚禮じや 空儀じや と いふ人は チト まちがうて は ございません か

心だけの　敬禮でも　滿足とは　申されぬ　のに　心にもない　うはべの　敬禮　何のやく　に　立ち　ましやう　心だけの敬は　よろしくなく　うはべの敬は　よく　ない　と　申ますれ　ば　どんな　敬禮が　よろしい　か　ろれは　申までも　ない　皆樣　よく　御考へ　なされば　御分りになりましやう

○貧賤の者をあなどることなかれ

人は皆　禮義といふこと　を　知り　ろれを　行はねば　なりませぬこと　は　だれも　よく　知て居まして　誰でも　神佛の前には　手を合せ　頭を下げて　敬禮を行ひ　或は　尊い人に　禮儀正しく　することは　別に　れすゝめ　申さいでも　うやうやしく　つゝしみ　へィ〳〵　ハィ〳〵　と　誠に　うやまい　つゝしみ　ます　が　自分より　目下の者に　對して　禮儀正しく　いたします　か　と　申すに　禮ぞ　ろ　で　ございません　あなどり　いやしめる　人が　多く　ございま

す　上に對して　は　むちや　くちや　に　うやまひ　下に　對して　は　あなどり　れでる　の　は　間違つた　了見です　『禮は人事の儀則なり』と　古人も　申されまして　人の行の　きろく　の　ようなもの　で　ろれ〳〵　と　ちがひます　から　あまり　分に過た禮　は　却て　失禮に　あたります　から　よく　わきまへね　ば　なりません。禮の第一　行ひにくう　て　六かしい　の　は　目下に　對する禮で　ございます　奉公人　などの　ような　目下の者に　對する　禮は　如何したら　よろしい　か　と　申せば　へィ〳〵　ハィ〳〵　どう遊ばせ　こう遊ばしませ　とも　まさか　いふても　居られませぬ　が　あはれみ　いたはる　ように　して　れもひ　やり　の　心を以て　あつかへば　よろしい　の　です　奉公人　かと　いふても　山に　わいたものでも　なく　野に　れちて　あつた者　でも　ございませぬ　やはり　人間の子です　神の子です　其親の爲には　なか〳〵　だいじ

の　可愛兒です　もの　吾子の可愛さ　に　引くらべて　いたはつて
やらねば　なりません　折には　金かけて　置てある奉公人　じや　も
の　使はねば　損じや　と　いふて　こぎ使に　つかふ人　が　ござり
ます　が　又　左樣な人の子　は　やはり　親に似て　奉公人を　いじ
めたり　あなどつたり　むりを　いふたり　して　奉公人を　苦めます
　ようしたもので　左樣な家には　ろくな　もの　が　奉公しませぬ
奉公人を　よく働かさう　と　思へば　禮儀を　正しく　して　痛はら
ねば　なりません　能く　奉公人　を　いたはり　奉公人に　對する禮
義を　正しく　いたしますれば　其外の禮義は　自然に　できます　が
　どうも　外面うはべ　と　いふもの　に　まよはされ　て　かなひ
ません　目下の者も　輕ろんじ侮らぬ　と　いふ心　が　あり　ました
ら　外面に　まよふ　こと　は　ござりません　これは　誰方にも　よ
くよく　心得て　おいて　もらはねば　なりません　隨分　心得た人

でも　外面に　まよはされ　目下を　あなどる〳〵こと　が　まゝ　有り
勝ちです　或る知事さん　の　宅へ　舊主　なる　華族さん　即　或殿
樣が　往かれた　こと　が　ござりました　然るに　其　殿樣は　ます
い風……華族としては……まづい風裝　して　紺飛白に　白木綿の　兵
子帶　を　しめ　大きな　麥藁帽子を　かむり　只　一人　もかれ　ま
した　が　取次の女　が　出ました　何方は？　と　申ました　殿樣は
何の某と　實名を　おつしやり　ました　御主人は　御在宅ですか
と　問はれ　ました　が　最早出勤して　不在です　と　答へました
殿樣は　何時頃　お歸りです　か　と　問はれ　ました　が　一時か
二時頃には　歸られ　ます　と　いひ　ました　ろれでは　待て居ま
す　と　申され　ました　が　殿樣の裝が　裝です　から　何と思ひ
ました　か　御上りなさい　とも　申ませぬ　父祖代々　祿扶持を　頂
いて居た　御主人の殿樣が　實名を　名乘出して　來て　居らつしやる

のに れ上りともいはぬとは何たる事でござりましやう
彼知事さんの奥様は殿様の御名前を知らなかつたのでござ
りましやうかまさか知らぬことはありますまいが装がな
りですから外面にあざむかれてツイ侮たものと思はれま
す又殿様はばかんと立て御いでしたが木で鼻くゝる
ような あしらいで驚かれましたでござりましやうが何
くはぬ御顔色でれ邪魔でも待たしてもらいましやうと仰
しやつて玄關の隅の方でつくねんと坐て居られました彼此
いふ中に十二時になりました中飯の時刻になりました しかる
に澁茶一碗出しもしませんで殿様ももはや怪へかねて午飯
を食べさして下さいと申されました言はれて見ればま
さか知らぬ顔もして居られぬものですから不承不承御膳を
持て來ました とび魚の燒たしかも半分のと冷飯昨日の

殘りか酸へたひやめしを櫃に入れて出しました殿様は
添と箸を取り茶づけ一碗食べられましたか膳もれ櫃も
うち遣り放題下げにも來ませんずいぶんひどいあしらいで
すサテ暫して一時か一時半かと思ふ時分に知事さんが
役所から退廳てれ歸りでしたが玄關で殿様と顔合はせ
コレハコレハと驚き直ぐ客間へ案内して何卒これへ
マアこれへと申されましたが殿様はイヤこゝで結
構御構下さるなといはれるのを强て客間へ通し主客
坐定まつて時候の挨拶もすみましたが俄に臺所の方でどさく
さとしてゐますろの中に茶も菓子も出ました又間もな
く酒肴も出ました知事さんは殿様に向ひ失禮ながら一献
とすゝめられましたが殿様は箸さへとらず苦々(
しい顔付して居られました知事さんは首尾わるうに酒

をすゝめ さかな を とり いろ〳〵 と もてなし ました が
殿様は イヤ肴は よろしい 酒だけ 頂戴と 仰しやつて 前の
飛魚の包を 懐から出し ろれを 前に れき 飛魚を 骨もろとも
にがり〳〵 と しがみ 酒を 御飲で した 知事さん は 驚き
ろれは と あやしみ 又 ろんな物 めしませい でも こちら
のを と 申され ました 殿様は イヤ 構て 下さるな 自分に
は この飛魚が 性に合ふて ある のじや これは 御手前の御内
室から 頂いた 肴・これさへ あれは 御酒も 澤山 飲める
と 申され ました 知事さん は この一言 雷か耳の側へ 落ちた
はゞ 驚かれ ました が よもや と 思ひ 御嚴言 仰しやな
と 茶かして しまはう と しられ ました が 殿様は きつと
なつて 仰しやる に は 今 私のいふことを 能く 聞かつしや
れ 御手前は 今ころ 立派な知事様 一地方の長官 で 歴ッきと

して 御出だが 元をいへば この私の 家來 では なかつた
か 勿論 私のような まづい者 に 家來の 何のと いはれる が
馬鹿らしく 思はれも しやう から 何とも 思ふて は くれま
いが 細君に 舊主の名は 何某じや ぐらい は いふても 有ら
うと 思の外 細君は 私の名を 聞ても 知らぬ樣子 で 御手前
の 返らるゝ まで は このとび魚 が 充分の 御馳走で あつた
のに 今に なつて いろ〳〵 山海の珍味を 並べ出す のは 何
の爲か 飛魚半分で 充分な あしらい の この私に この珍味 コ
レは 御手前の相伴か 御相伴 御相伴 如何に 文明の今日 とは
いひながら あんまり 人を 馬鹿にした もの でも あるまい！
舊家來の者供 が 御手前の事を 水くさい とか 薄情ダ とか い
ふこと を・聞ては 居たが まさかに と 思へども 度々 其樣話
を 聞くにつけ 如何なもの か と 思ひ 今日 來たのも 外では

ない様子を見た上、忠告もしたいと思ふ故、來たのじやが舊主馬鹿ではあるが舊主のこの私にさへ斯様なことならば外は聞くまでもなく分てある全体如何いふ心得かといろ〳〵意見しられたことがあるうですこれは自分が出世した故人を人とも思はず同藩の士族をあなどりましたから殿様がれ叱りなされたものですこれもやはり禮を知らず外面にまよふからです必ず〳〵下の者でも敬ふ心をはすれぬよふにしてほしいものです

○學ばざれば牛馬に同じ

人は肉体と心の二ッで出來てござりまして この二つの者がたすけ合ふてまんろくな人になります のて肉体とは手足頭胴目口鼻などのことで即五体のことで心とはたましい即精神の事ですろして肉体も心もつよくもなりよわくもなり今までつよかつたものもよわくなりよわかつたものもつよくなりまして やしないようにによつてどんなにもなります肉体は米麥野菜獸肉魚鳥の肉水鹽などの食物をもつて養ひます若この食物を用ゐねば肉体は衰へて來まして成長さすことが出來ませんに肉体を養ふことは一二歳の小兒より八九十百歳の老人に至ります まで皆よくいたします イヤ時によつて肉体のために罪をつくり規則を犯しても致しかねませぬよはど肉体の爲には盡してやります がかんじんの心を養ふことを怠る者が多分にござります心を養ひ心を成長さすもやはり食物がいります心の食物は何かと申せば即智識といふ者てす智識を あてがはねば心は成長しませぬしなびてしまいます智識を與へぬ心はちやうど水の

切た　植木見た　ようです　人は萬物の長　と　いふて　萬物に　すく
れて　居ます　のは　奇妙不可思議な心　と　いふ者　を　神さま
より　與へられて　ありますから　です　ろれに　ろの　結構な　心を
養はす　心の食物を　與へず　折やつて　れく　とは　何といふ氣で
でざりましやう　か　肉体には　ろらい　親切で　心には　又　ひど
い　不親切では　でざりません　か　神より　折角授けて　下さつた
心を　打ちすて　れく　とは　勿体ないこと　で　でざりません　か
饅頭一つ　薬てゝ　も　勿体ない　と　申ます　のに　けつてうな
心を　うちやつて　れく！　なんと　勿体ない　では　でざりません
か　肉体ばかり　大事にかけて　心を　はりッばなし　にして　れ
きましては　人の人たる　ねうちは　どこに　でざります？　鶏や
犬が　終日　てん〳〵　あくろく　と　はしり　あるく　のは　大かた
食物の爲に　はたらいて　居ねのでは　ありません　か　神の子な

る人　萬物の長　と　いはるゝ人　が　犬や　にはとりの　ように　し
て　ねまして　は　つまらぬ事じや　でざりません　か　もし　我大日
本國の人　が　殘らず　智識を　求めず　心を　養はずして　肉体ばか
り　養ふて　居ましては　東洋第一の　この日本國　この神國も　つま
らぬ　ものに　なる　で　でざりましやう　いかなる　しごと　も
智慧の　いらぬ者は　でざりません　能く考へて　てらふじません　人の
身体は　皮はうすくて　鳥や　獸のように　あつさ　さむさ　を　しの
ぐ　毛や　羽が　はへて　は　でざりません　爪や　齒は　鳥獸の爪や
齒に　れよびません　しかし　有がたい　こと　には　智慧といふ
結構なもの　に　よりまして　衣服と　いふ者　を　こしらへ　あつ
いとき　寒いとき　ろれぞれ　時候に　應じて　綿入とか　袷とか　單
物とか　時候相應な　羽や毛に　勝つたもの　を　こしらへ　ます　又
人は　空を飛ぶこと　を　ようしません　けれども　智慧に　よつて

飛鳥をも落すと出來れば風船といふものをこしらへて空を翔けることも出來ませう又犬や馬のように走ることはよふしませんけれども智慧によりまして犬馬なぞが とても及ばぬ位速くはしる滊車や鉄道をこしらへます又人の力は牛馬には及びませんけれども智慧を以ていろ〳〵の器械をあみだし百貫千貫の重さの者も容易に上げたり下げたりうごかしたりはこんだりいたします又人は魚のように水中を自由にれよぐことができませんけれども船をこしらへて水中を自由自在にはしりまわれますなるほど萬物の長とはよく申してござります ろの又萬物の長といはれる價値はどこから出ますかどこにあるかと申せば心でござりましやう御互に神の尊さ神の御榮神の御恵をの知りますは心がしつてゐるのでござりましやう この心を

發ふのは何かと申せば智識で智識は何から得るかと申せば目口鼻耳身皮膚からです しかし目口鼻耳などから智識を得ますが最も簡便な智識のとりかたがあります其簡便法とは外でもござりません學問を申ます即心を養ふ良き方法はと申せば學問より外に良き方法がござりませんろうです から學問はせひとも して れかねば なさけないが牛馬の中間入りして くるしまねば なりません神は けつして ろんなものをれ好きなさりません又決してれ喜びなさりません

○智識は心意の食物なり

ニャン〳〵と なく聲を聞けば猫が鳴て居ると知りカア〳〵と なく聲を聞けば烏じやと わかります のは何故ですかと申せば ろんな事は言はいでも知れた事じや耳があ

つて きく からじや と 仰しやる 御方も ございましやうが
ろれは なるほど 耳が ろの聲を 聞く よつて では ござ
りますけれども 決して 耳が 烏じや 猫じや と 知て居るの
ては ございません ろの 証據に 生れて 百日 ばかり より
經ぬ 幼兒も 聾で なかつたら やはり カア〳〵 ニヤンニヤン
と きこへる に ちがひ ございません けれども 烏じや 猫じや
と いふこと を 知らぬ に ちがひ ございません 烏を見て
は カア〳〵 猫を見て は ニヤン〳〵 雀を見て は チユン〳〵
と いひます 即 耳に 聞へる通り に 其を呼び 其鳴聲 或
は 其形の似た ものは 皆 同じこと と 思ふて 居ます これ
を 以て見ると 耳が 烏じや 猫じや 雀じや と 知て 居るので
無く 外に これは烏 これは猫 これは 雀と よく知て 居るも
のが あるに ちがひ ございません ろれは 何か と 申せば

心……靈魂と いふ者 てす ろの 心は 智識と いふ者で 成長
いたします 智識を あてがはねば 心は 成長しかね ます ろの証
據には 幼少な子供 は なんでも かでも 口へ もつて往て ねぶ
ります ア、 ろれは 辛ひ〳〵 これは 苦い〳〵 と いふても
辛ひとは どんな味 苦いとは 何んなもの と いふと を 知ら
ず 無頓着に 口へ入れて 始て れどろき 泣き出します 世の諺に
『猫に小判』 と いふこと が ございまして 誰でも 欲しかる小判
ろれを 猫に 投げ與へて も 猫は 小判のよい事 を 知らず
自己に 中てられる こと と 思ひ 恐れて逃げます 又 一二才の
小兒に 一圓の銀貨と まんぢう と を 並べて 見せましたら ヒ
カ〳〵 と 光る 銀貨よりは まんぢう を 取ります に ちがひ
ない と 思はれ ます 即ち 世にいふ 頑是ない の です 頑是
ない と 申すは 心が 充分 成長して 居らぬ と いふこと で

すこの頑是なき者に何とか彼とかいろ〳〵ものを教へますことが何時となく耳から入り目から這入りして世間の事を見ならひ聞ならひして智識を得ついには何時の間にやら欲心かできまして この欲心と神より授けられた良心とたゝかふようになりまし善人とも悪人とも なります或る歌に

心ころ、心まよはす、心なれ、心に心、心もるすな

と申して ございます 悪心 欲心の爲に 良心が まよはされますから 能くよく 氣をつけて 心を養ひ 成長さしませねばなりませぬ 又 或歌に

よきも友悪しきも友そ、かゝみなる、見るに心の、くまをみがけば

心のくもりをはらいまして 世の中のよき あしきをうつしてよく 見分けますれば 善も悪も みな 吾身をたすけてくれる 友達となります の です 心の鏡を みがきます には よき智識を以て みがかねば 心のくもりを 取り去ること が できません 神の御前に明皎々と したる 御鏡を すへて あるも心のくもりを 照らせよと いふ心かと 存じます かゝみのくもるのは ほこりがかゝる一からで 心のくもるのは 欲といふ ほこりがかゝる からです 何でも 御互につとめまして いつも 心の くもらぬ ようにして 智慧の光でてらさねば なりませぬ

○大御心を心として國のためにつくすべし

この地球上に ある 國は 其數 幾百と いふ くらい で ございますが 恐らく 我大日本 はどの 珍らしい國は ございません 天祖 天照太御神 が 天孫 瓊々杵尊に 三種の神器 を 御授けに 相成まして から 三千餘年の ろの間 臣として 天位を うば

ひ　天子として　人民と　御爭ひに　なつた事なく　大奸賊の　北條高時　足利尊氏　で　さへ　天子の御位を　覬覦しません　天地の有んかぎり　彌さかへ　に　さかへたまい　萬世一系の天子樣を　上に頂て　居る　吾々人民は　なんと　幸福では　ございませんか　廣い世界の中　に　大きな國　も　ございまして　皇帝とか「サルタン」とか「パシヤ」とか　いろ〳〵　の　國君も　ございます　が　我日本の天皇陛下　には　御苗字　と　いふ者　が　ございません　この　御苗字の　ない　のが　即　我皇室の　秀でさせ玉ひ　外國君主の　及ばぬ　ところ　です　我　皇室は　御苗字を　御用ひに　なる　必要が　ございません　他姓と　區別する　必要が　ありません故、御苗字は　入用ませぬ　西洋の或國の天子が　日本の天皇陛下に　御苗字ない　の　は　如何いふ譯か　と　問ひ　御苗字の　入用らぬ譯　を　きいて　甚だしく　感心　しられた　ろうで　ございます

「天地のかぎりなかれとちかひたきし神のみことは吾君のためかゝる　とうとき　天皇陛下の臣民　と　なり　かゝる尊き　御國の人民と　生れ來ました　吾々人民は　いかに　ありがたく　いかに　かたじけない　こと　では　ございません　か　我　天皇陛下の　御仁德いかゝ　で　ございましやう　磐梯山の破裂　十津川の水害　濃美の地震　大阪三軒屋の大火　ろの外　人民の不幸な事　あるごと　に　莫大の　御手許金を　下さります　こゝで　よく考へねば　なりません　アレは　不幸な目　に　あふた者に　ばかり　下さつた　の　じや　吾等は　一厘半錢の　御惠み　を　戴かぬ　と　思ふ　の　は　大變な　大間違です　吾々人民に　一体　下さつた　のも　同然です　願はぬこと　です　が　若し　萬に一つも　吾々で　天災地變　洪水とか　地震とか　火事とか　山が破裂した　とか　で　不幸な事に　逢ふたらば　我至仁　至慈なる　天皇陛下は　御乘てれき　玉はず　必ず　御めぐみ

下さるに ちがひ ございません 萬乘の御身を以て 兵卒の食るに ぎりめし を めしたり 兵卒の靴を わざ〳〵 借て 玉体に 付させられ たり 遊ばす のは 決して 決して 御物數奇 に あろば すの では ございません 御膳部は と 申せば 昔の 一萬 石の城主より も 劣よふな 物を めしあがり いろ〳〵 御倹約 あろばして 澤山の 御手元金を 軍艦製造費に 充させられ ます のは 何の爲です か 何卒して 吾々人民を 安樂に くらさせ たい との 御思召 で は ございません か 軍艦費補助の 御詔 下るや 日本の臣民 皆感悦の涙を こぼし 五百圓 千圓 一 萬圓と ろれ〳〵 献金を 願ひ出で ましても 人民に 迷惑させ て は すまぬ と 御許なさり ませぬ 大御心 何と 申して よ ろしいか 雨が降ぬ と いふては 御心配 米が高い と いへば 御心配 只唯 人民を 安樂に くらさし たいの 御心 寢も 寤

ても 御わすれ なさり ません 又 この日本の外には ロシヤ と か フランス とか イギリス とか 大きな つよい國が ございま す これには 又 はぜよく つきあひ 日本の 國の威光を れとさ ぬ よふに あなぜられぬ ように せねば ならず 此等の 御心づ かひ 御大体な ことで は ございません この 御心配 を どう して 御なぐさめ 申 ことが できましやう か 三人や 五人の者 が 御前へ出て 面白い 話を 申上げたり 珍らしい物を 差上た り して ろれで 大御心を 御休め申すこと が できましやう か なか〳〵 ろんなこと では 御心の 安まる ことは ございます まい 吾々臣民は 法律規則を 守り 學問を勵み 智識を みがき 國の利益を起し 何でも 我日本を 富まして 吾々の先祖が しまし た樣に 忠義を つくさねば 決して 大御心の 安らかに ならせら るゝ ことは ございません 斯樣な 結構な國に 生れ 斯樣な

結構なる　有がたき　天皇陛下の　臣民と　なりました　吾々　御互は
仁義忠孝の道を　つとめて　この　御高恩に　報ひ奉らねば　なりま
せん　しかるに　世の中には　天皇陛下の　御心を　痛めさせ　玉ふと
も　思はず　利にまよい　欲に　心を　うばはれて　いろ〳〵　の　罪
を　れかしたり　公事訴訟に　すつた　もぢつた　の　と　爭ひます
のは　何といふ心　やら　サテも　なさけない　こと　で
ございませんか　御互に　天皇陛下の　御心を　御推察　申上げ　法
律規則を　れかさぬ　ように　にして　譬ひ一刻　たりとも　大御心の
安らがせ玉ふ樣に　いたしませねば　神の　尊き神の教を　守る
者　仁義忠孝で　あつた　日本人と　いふ價値が　とでに　ございまし
やうか

○身の爲に君を思ふは二心
君の爲には身をも思はじ

これは　我國隨一の大忠臣と　いはるゝ　楠公樣が　詠まれました　歌
で　ございまして　サスがは　楠公　詠まれます歌　でも　自然と　赤
心が　あらはれて　ございます　この歌の意は　吾身の幸福を　得るた
めに　君を　もとめ　君を思ふのは　二心じや　君のためには　吾身
ぐらいは　かまはぬ　と　いふ心を　よまれ　ました歌で　ございま
す　楠公父子の事　は　我國の歴史を　れよみ　なさり　ました人　は
能く　御存じで　ございましやう　が　かような　大忠臣の事跡を
御話いたします　の　は　吾々が　尤も　よろこばしく　思ふこと　で
す　から　荒ました　れ話いたし　ませう　今より　凡ろ　五百五十餘年
人皇第九十六代　後醍醐天皇の　御時　鎌倉の執權職　北條高時と
いふ者が　ございました　この北條氏は　鎌倉將軍家の家來　で　陪臣
即　又家來です　が　代々　日本の政治を　わがまゝ　に　いたしまし
た　北條家の　吾まゝは　九代前の　義時と　いふ者　の　時より　云

ふに　云はれぬ　程の　むちやくちやを　しました　が　ろれにも
係はらず　代々　日本の政治を　わがまゝに　いたし　天子様や　將
軍を　ないがしろにして　終には　天つ日嗣のこと　までも　かま
ふ　ように　なりました　後醍醐天皇は　御賢明の　天皇ですから
北條氏の吾まゝを　心にくう　御思召して　何がな　北條を　亡ぼし
て　御歴代の　御鬱憤を　はらさうと　なさりしたが　天下の
武士は　みな　北條の勢に　ねろれて　天皇を　御助け　申上る者も
なく　天子方に　なる者、は　皆　ひゑい目に　おはされ　ました　天
皇は　御夢の　しらせに　より　楠公をれよび出し　になりました
楠公は　山城なる　笠置の行在所　へ　參られまして　綸旨を　頂戴し
河内の赤阪山に　城を築き　又　金剛山千早城を　れて　勤王の旗上
げを　致されました　廣ひ日本國　多くの臣民の中で　天子の御爲に
忠義の旗を　あげました者は　楠公唯獨です　八代九代も　つゝいて

飛ぶ鳥さへ　睨み落さんばかりの　北條に　楯づく　ものは
楠公一人　です　八十萬の大軍は　うんが　の　ように　集て　千早の
城を　攻ました　楠公の兵卒は　わづかに　九百餘り　です　まこと
に　千人足らずの　兵でも　心一つにして　其上に　智勇兼備の　大忠
臣　楠公が　居ますから　八十萬の大敵をも　うちまかす　ことが
できます　楠公は　敵の大軍をも　ものとも　思はず　いろ〳〵の　計
略を　もつて　北條方を　打ちなやまし　ました　この有樣を　見て
天下の武士が　ぼつぼつ　北條に　ろひき　西ひがし　南北　所々方々
に　忠義な　さむらいが　出て　北條を亡ぼし　遠き島路の　隱岐國
に　れはします　後醍醐天皇を　再び　都へ　御迎ひ申上る　ことが
できました　これも　全くは　楠公が　始めて　義兵を擧げて　忠勤を
はげみ　ました　から　天下の　忠義の士も　みな　たのもしく　思
ひ　北條と戰ひ　ました　から　で　あらふと　私は　思ひます　ろ

の後　足利尊氏と　いふ　大逆臣　大姦賊が　山海の皇恩に　負き奉り
謀反　いたしまして　九州より　五十萬の大軍を　引きつれて　都の
方へ　攻上りました　ろの時　楠公は　どうして　こうして　とはか
りごと　を　申上られ　ましたが　人のために　さまたげられ　已むを
得ず　攝津なる　兵庫へ　賊を拒ぎに　もかれました　何事にも　ぬけ
めない　智慧ふかき　楠公は　この度の　いくさ　勝利は　とても　れ
ぱつかない　と　思はれ　ました　から　彼忠孝のかゝみ　とはめら
るゝ　小楠公　ろのとき　僅か　十一歳の　正行公と　攝津の　櫻井驛
で　長のわかれ　を　なさり　ました　この櫻井の子別れ　はど　哀れ
に　又　いさましい　こと　は　ございません　世の中に　子はど　可
愛い者は　ございません　子故に　泣も　よろこびも　笑も　れてりも
して　子のこと　を　あんじ　二三里も　へだつ所へ　出して　やり
ましたら　ろの親の心配　は　如何で　ございましやう　暑につけ　寒

につけ　雨につけ　風につけ　案じるのは　すべての親の心　です　し
かるに　今　僅十歳か　十一歳の兒供を　一人　家に　のこし　矢や石し
の　とびちがひ　斬つ　斬られつ　する　戰場へ　戰死を　覺悟で　往く
心の中　如何で　ございましやう　勿論　忠義一圖に　こりかたまつ
たる　楠公でも　罪のない　愛らしい　幼子の顏を　見れば　サスカに
胸は　れぢり　ます　はりさける　ように　なります　が　われから
心を鬼にして　肌に付けたる　守をとり出し　これは　笠置の皇居で
戴いた　綸旨じや　これを　與ふる　ぞ　この度の　いくさ　萬に一
この父が　討死せば　天下は　足利の爲に　足利の下風に　つくで
あらう　が　ろれでは　天子樣を　御守り申す者　が　ない　足利の
方へ　したがへ　ば　出世も　でき　樂も　できよう　が　必ず　足利
に從ふて　後の人に　笑はれな　城は　小さくても　千早の城は　この
父が　八十萬の大敵を　相手に　とりて　一度も　まけし　こと　なき

要害の地　撃ちもらされた　郎黨も　呼びあつめ　たら　二百　三百が者　は　有るもへ　何卒　この父の志を　つぎ　必ず　主上の御爲に一戰して　賊をなやませよ　決して　利にまよひ　よくにひかれて楠一類の名を　汚すな　と　くれ〳〵も　いひきかし　ました　正行公は　只　はいハイ　と　かしら　を　下げ　玉のような　涙を　てほし　頭も　得上げず　かなしみ　ました　が　名殘れしさ　に　涙の顔を上げ　聽くもらせ　一所に　つれて　もろともに　討死さして下されと　申されました　楠公は　両眼　くわつと　見ひらきて　泣くか!?　女のよふに　と　口には　鬼々しく　しかつて　居ます　けれども　これが　この世の　見れさめ　か　吾亡きあと　は　如何にするかと　思へば　ろの　胸の中　如何で　ございましやう　忠義に　てつたる　楠公　でも　喜怒哀樂の七情は　皆れなじこと　千萬無量の悲みは　口や　ことば　に　つくされ　ません　ろてら　に　居る　兵士たち　鬼をも　ひしぐ　勇者でも　親子の別れの　いとしき　にみなよろいの袖　を　ぬらして　仰ぎ見るもの　ございます　ません　何まで　居ても　話しても　つきぬ名殘は　れなじこと　ヤガテ　父と子が西と南へ　わかれもく　路はちがへど　氣は同じ　忠義の心は　一すじに　立てぬく　武士の手本　楠公は　ついに　兵庫で　手いたく　戰ひ　切死　せられました　が　大奸賊の尊氏　さへ　楠公の首を見て泣きかなしみ　河内へ　送りといけ　ました　又　正行は　成長ののち父の教を　まもり　はなゝしく　戰ひ　忠義のため　に　身をすてました　楠公父子の忠義　まことに　神國の民　神の子孫たる　價値が　ございます　君に忠をつくす　は　神に　正しく　仕るのも　同じこと　です　不忠なものの　なんの　神樣が　れまもり　下さり　ましやうか　神樣が　どうして　御救ひ　下さり　ましやう　か　どんな藥を　のんでも　くび　釣て　は　死にます　いかに信神しても　不正な

こと を しましたら 何のやく にも 立ませぬ

○時を正しく守るは信なり

四時行はれて 萬物育す 春夏秋冬の四季の 時候が 正しく めぐり

ましていろ〳〵の 作物も てきると 申すもの 四季の時候が

正しくめぐらず 春は夏のよふに あつく 秋が 冬のように さむく

むちやくちや に 雨降たり 風ふいたり しましたら どうで

ござり ましやう 田畑の作物に 害あるだけで なく 人の身体に

大變な害が ござりましやう しかし ろんな ひどい事は あまり

ござりません マア春は あたゝで 夏は あつく 秋は すゝしく

冬は さむく 四季たり〳〵の 花や實が 出來ます のは 天地

の信で ござりましやう 天地に 信がなく 時候が 不順で ござり

ましたら 萬物が ろたちません 國に信が なければ ろの國は みー

だれます 人に信が なければ 人の ねうち が ござりません ま

こと と いふ事は 口でいふこと と 身に 行ふこと と が 一

致するので たとへば 明日八時に 參ります と 申せば 必ず い

ふた通り 八時に もく の で 八時より 後れぬ ように する

こと を 申す の で 一旦 こう といふた時 には どて

まで も まちがへず たとへ 火の中 水の中 山の上で も 谷の

ろて でも しとげ ねば なりませぬ こう 申せば 中には 又

其樣なこと いふても 物事は ろう 箱をさした ように きつし

り と できぬ と 仰しやる 御方も ござりましやう が 言ふた

とをり きちつと できぬ こと を 知て居る なら 最初に 輕

々しく 口へ 出さぬ ように すれば よろしい 口に 出し 言

に述べた こと は 是非とも 爲ねば ならぬ と れもへば 輕が

るしく 口へは 出して 申されません かる〳〵しく 申しませねば

罪は ございません 世の 喧嘩いさかい は 大抵 口から れて

ります　口で　申すこと　は　なんでも　大きな事　でも　いへます
が　でれを　所作に　行ふことは　できません　なるべく　行を先にし
まことの道に　はづれぬ　ように　せねば　なりません　何時頃か
ら　始まつた　ことか　ぞんじ　ません　が　たとへ　ば　九時に
あつまる　ことが　あると　九時……　きつちり　九時に　あつまれ
ば　よろしい　が　大方は　正九時に　出て來ません　ろうですか
ら　知らせる方　では　加減して　七時とか　八時とか　すこし　早
い目の　時刻を　いふて　やると　來るものも　ろれから　加減し
て　丁度　九時頃に　あつまると　いふ　ような　もので　七時な
ら　七時　八時なら　八時と　きつしりと　行きも　せねば　來も
しません　互に　加減の　しやいです　加減のしやいと　申せば
一寸聞き　は　よろしく　きこへます　が　つまり　うろの　つきや
いです　ろの　嘘のつきやい　して　平氣で　ねる　とは　因り入た

こと　では　ございません　か　地方税とか　營業税とか　を　納
める期日は　令狀に　何月何日に　納めよと　日切りを　かき付て
あるのに　其日が　過ぎても　持て　行かず　たび〳〵　さいろく　し
られて　喚狀　つけられて　小言　いはれて　後で　なければ　納めぬ
人が　世間に　いくらも　ございます　これは　誠の道に　はづれ
た　仕業で　人民たる　公義務を　怠る　と　申すもの　です　てん
なこと　は　なんでも　ない　ように　思ふ　御方も　ございましやう
が　時間や期日を　守るのは　信を行ふ　よき　手ほどき　です
時間や　期日　を　守つて　まちがへ　ぬ　ように　しましたら　金
錢の貸借　ろの外　いろ〳〵の　ごたく　が　れてり　ません　公事
訴訟に　いらぬ　金錢を　ついやす　ことも　なく　まこと　に　あ
んらく　に　世を　れくる事も　できる　神の御助をも　得る　わけ　で
す　から　言をつゝしみ　時間を　まもる　ことを　第一に　して

いたいきたいものです　信神と申すもやはりまことの心をもつて神に仕へるのですからよく〳〵心得て置てもらはねばなりません

○朋友の間柄は信を第一とす

世の諺に類を以て申して將棋好は將棋好と中よくあつまると百姓は百姓と話のうまがあいますようによの中にゐる人だれひとりとして友達のないといふものがでざります　まい既に友達があるといたしますれば友達同志つき合ふ道といふものがなければなりません　即『朋友相信じ』とは廿三年御下しになりました敎育勅語の御本文です　信は友達同志つくしあはねばならぬことです　信とはしんじつまことの心を以て友達同志つくし合ふのでこの信の心がありますれば決して人の道にはづれたことは

はしませんが身よく身勝手といふものがあつてツイ友達同志の心をみだします　もへ一ッの事をしやうと思ふたらよしあしきをかんがへじぶんの得にもなり人の利益にもなることならするがよろしいがもしじぶんの得にはなつても人の損になるようなことなら止めねばなりませんなぜと申せばこの世は吾身ひとりの世でござりませんから吾身のことばかり思ふていたしましては大變なわるいことも しかねませぬ『小人無黨其曹爲朋者僞也』と支那の歐陽永叔といふ人がいはれました　小人とは欲にまよひ人の人たる道を行はぬ者のことで　ろの小人には何故友達がないかと申せば小人が友達となりますのは欲のよりあいで犬が一つの食物の處へあつまるのもたなしことで一時利を分ぶりする爲になかよくしてねますが利

がなくなりましたら　もう　友達でも　何でも　ありません　ろれで　歐陽公は　其暫爲朋者僞也　といはれたのです　むかしも今も　よく　といふ　惡魔は　亡びぬ　と　見へまして　發企人とか起業者とか　委員とか　立派な　片書付きで　大きな會社を　たて商業なり　工業なり　を　はじめよう　と　する　最初のかゝりは互に　腹藏なく　心底を　うちあけて　相談し　政府への願やら　株金の募集やら　チヤン　と　出來　サテ　これから　と　いふように　なりまして　かんじんの　會社のこと　は　打遣り放題　誰が　金を　どうした　とか　何某が　株券を　何した　とか　何とか　彼とかでたく　を　起し　切角　骨を折て　漸く　出來かけた　會社　ろくでも　ない　あらろひ　の　ために　互に　疑念を廻し合ひ　赤目をつりあふて　最初　もくろんだ　事業も　水の泡に　なります　即歐陽公に　歌はれる　連中です　むかし　尾州の名古屋に　中西淡洲と

欠

MISSING

とか　何の彼のと　小言を　いひます。のは　實に　勿体ない事　で
は　ございません　か　小さいものは　ろの物の　全体を　見ること
が　できます　けれども　大きなものは　僅かに　ろの　一部分よ
りは　見へませぬ　この　世界は　大きなもので　全体を　見ること
が　できません　又　この　湯呑茶碗は　小さいもの　です　が　ま
るきり見ること　が　できます　ろれと　同じこと　で　親の御恩は
あまり　大きく　して　全体が　見盡されぬ　の　です　ソシテ　ろり
を　もらふ　たり　下駄を　もらふ　たり　した　ホン僅かの恩を
大そうに　有がたがり　ます　の　は　ツマリ　小さい事　か　見へる
故じや　と　私は　かんがへます　誠に　親といふ者は　子のために
は　自分の身　さへ　忘れる位です　子が　若し　餘所で　悪戯して
他所の子を　泣かせて　かへれ　ば　うちの兒供　は　つよい者　じや
から　いつでも　勝て歸る　と　思ふて　よろこび　泣かされて　か

へれば　大人しい　から　まかされる　の　じや　あまり　まんがち
で　人の子を　なかせ　たり　するより　は　まし　じや　と　思ふて
は　よろこび　じぶん　が　たべる　もの　をも　食はず　して　食
はし　きるもの　も　きずして　子供に　衣せ　母れや　でも　ろの通
り　自分が　嫁にゆく　ときに　あれの　これの　と　よりこのみ
を　して　こしらへた　きもの　れしけ　も　なく　子の爲に　は　し
たて　なをして　ろれを　着せ　似あふ　とか　似あはぬ　とか　いふ
て　一身　まるで　子の爲に　はたらいて　居ります　ろれを　思へは
決して　れろろか　に　は　思はれません　けれども　大な　大な
父母のれん　は　あまり　大きすぎ　て　全体を見ること　が　できま
せん　から　ツイ小言を　いひます　が　なかなか　小言を　いふべき
こと　で　ありません　自身が　親になつて　子を　ろだてる　よう
に　なつて　ア　なるほど　父母の御恩は　口にも　言にも　つく

されぬ　と　云ること　が　わかる　の　です　から　必ず　父母の　安
心なさる　ように　して　よろこばさねば　なりませぬ　さもない　と
きに　は　父母が　死なれ　て　から　父の事や　母の事を　れもふて
も　モー　六日のあやめ　です　今まで　の　こと　思ひ出し　はか
へ　ゆき　いろ〳〵　と　あやまり　まして　も　石碑は　答むして
へんじ　も　いたしませぬ　泣ても　わめいて　も　追ッ付き　ません
ろうして　みれば　なんでも　両親の　ござる間　できるだけ　孝行
をして　れかねば　なりません　忠臣を求むるは孝子の門に於てす　と
申して　親に　孝行な者は　必ず　忠義な人です　又　友だち　に
も　しんせつ　な　人　です　ろれで　孝者萬善之本　と　いふ　て
ございます　不孝の人は　人に　きらはれ　うとまれて　神も　れ見限
り　なさり　ます　から　よく〳〵　心得て　ほしいもの　です　孝行
せず　して　神の御助を　うけよう　と　する　の　は　山へ行き　木

にのぼり ろして 魚を さがす も れなじこと です

○孝は大悪人をも化して善人となす

孝は萬善の基と 申まして 父母に 孝行をする のは すべて の善い事を する 始めで ござります いかはど 他人に はめられ 他人に すかれ 他人に 對して は あさけふかく やさしく いたしましても 親に 不孝で ありましたら サッパリ しかたが ござりません ようした もので 親不孝な者に 正直な 律義な 人は ござりません たとへば 家を建てる に も 地つき を しつかり して 柱石を ちやん と すへて はじめて 丈夫な家も 建てられる もので 家が いかはど 丈夫に くみ立ても どだい が しつかり して なければ 雨に風に ばちばち と もがめられ て ろの家は 到底 永くは 保ちにくう ござります ろれと 同じこと で 孝行と いふ事 は 善事を行ふ どだい で まつ

孝行を かんじん に いたしませねば なりませぬ なぜと 申せば 親を愛する心 を れしひろめて 他人を愛し 他人に なさけを かけ 親をうやまふ心 が ひろまり まして 神を うやまひ 他人を うやまふ の で 親を 愛せず 親を敬はず して 他人を うやまひ 他人を 愛する こと が できろうな はづ が ござりません よし又 ろれが できる と 申しても ろれは 偽の愛 偽の敬 です 神の にくしみを うける あしき 行で ござります 又 いかなる 大悪人でも 良心と いふ 神に ひとしき心 が あります から 一時は 身欲 身勝手に 心まよひ 道に はづれた 正しからぬ行 を いたし ます 者も この孝の爲に 今まで く らさされて 居た 良心を ひきれてし 悪心を ひるがへし 悪行を 止める もの も 多く ござります こと で まゝ子 と まゝ 母 と 中わしく まゝ母の いぢわるき心も 孝行のため に 眞身

の親子より　一層上こす　間柄に　なります　世の中には　いぢめられる　子の　わるい　ことを　思はず　まゝ母が　わるい　ように　申しもし　思ひもいたし　ますが　ろれは　子たるもの　が　行屆かぬから　かと　私は　考へます　子の眞心が　屆かぬ故　まゝ母の　眞心を　よび起されぬ　ので　ございますまいか　ワン〳〵　と　吠へて　かぶり付く犬は　打ちも　たゝきも　できます　が　尾を　ふり　うれしろう　に　して來る犬は　たゝく氣に　なりません　シテ見れば　いかなる　むごい　まゝ母でも　まゝ子の　まこと　が　通れば　我を折て　やさしく　なるに　ちがひ　が　ございません　ろれを　能くも　かんがへず　して　きづよい　母じや　とか　口やかましい　母じや　とか　いふたり　思ふたり　して　まゝ子根性を　出しますから　きつく　しられる　ので　ございます　これは　大悪人を　孝心で　善人に　かへらした　御話で　ございます　が　江戸　即　今の東京の　湯し

ま四丁目に　三郎兵衛と　いふもの　が　ありまして　この人　九歳の　ときに　わるものに　かどわかされて　奥州の方へ　つれて　ゆかれ　ました　が　路に　たちたる　紙屑　見るたび毎に　ひろふて　たもと　へ　入れます　悪者は　怪みして　何故　ろのように　する　と　問ひました　三郎兵衛が　申ます　に　れ父さん　は　紙くず商を　して　ござるから　すこし　の　かみくず　で　も　ひらふて　上げた　らば　よろこばッしやる　と　申ました　年は　も　もかぬ故　とは　申　ながら　悪者に　つれられて　知らぬ　他國に　さまよふて　再び　父　母の顔を　見らるゝ　とも　見られぬ　とも　わからぬ　の　に　一心　に　父をしたひ　父を愛し　父の　なりわい　を　助けよう　と　する　心の殊勝さ　又常に　膳に向ひ　食事を　いたします　にも　こち　らが　江戸と　思ふ方に向ひ　れわがり　と　いふて　箸をとり　寢ま　すにも　江戸の方と　思ふ方へ　向ひ　れやすみ　と　いひ　なみだ

をこばしなきかなしみ父母をこひしたふ心根のいたはしさよろの見る目もあはれにござりました今日よ翌よと日数もつもり一月ばかりも過ちましたが只の一日も御食り御寝みの禮式缺たことはござりませんから悪漢も良心を刺激しられ己が今まで父母に不孝であつたことを悔みアアわるかりしと氣が付き人をかどわかすような悪業をなせ又しかけたやらはぢ商賣もいろ〳〵あるものを何として こんな事を商賣にしたやらこの子のような孝行な子をかどわかして両親の心配もかまはぬと は實に虎狼にまさつた仕業じやこの上はたとひ乞食非人になるとても ふつつり思きらねばと決心して すぐさま三郎兵衛をつれ元來し路を辿り〳〵て江戸へかへり其門口まで送りといけあと白雲とにげゆきました父母のよろこ

び如何でござりましやう一方ならぬ心配してさがし加じ祈禱に手をつくし心をつくしさがしても一向しれなんだ子が思ひもよらず歸り來し子のついがない顔見たうれしさ想ひやられます三郎兵衛はこひしこひしいと思ふて居た父母の顔見たときの心の中一家中みな〳〵うれしなみだに六ッの袖をぬらしました サテ、ろれより三郎兵衛はいよ〳〵孝行をつくし年たつにつれます〳〵両親をなぐさめ家業をはげみましたがろの後彼悪漢は三郎兵衛の店さへ來まして以前にした悪行をざんげして今は安樂に其日を送りて居るといふことをはなしして申ますにコレと申すも れ前さまの孝行にかんしんしましたゆへての首モー疾にないものをれ前さまのわかげでいき永らへて このようにして居るもれ前さまの賜ものですとよ

ろこび　禮を　いひました　以前は　人の子を　かどわかし　人の子を
賣りて　不義の利を　とつて　居た　大惡人も　類なき　大善人　と
なりました　の　は　何故です　か　儘か　九歳の小兒の　大孝心に
かんじた　もへ　で　ございましやう　誠のとく　は　大小の　差別
は　ありません　神は　かならず　まことを　あはれみ　なさります
御互に　神の御惠御助を　得たいと　思ますば　孝といふ　こと　夢
にも　れ忘なき　ように　して　はしいものです

なり

○兄弟和合は家のつよみなり

むかし　毛利元就といふ　御方が　臨終に　なつて　枕もとに　ござる
子達を　呼で　一本づゝ　の　矢を　各自に　もたせ　ろれを　一
人　一人　折て見よ　と　申されました　が　子達は　あやしみ　なが
ら　も　父上の命令　です　から　すぐに　折て　しまひ　ました　ろ
れから　又　各自の持て居る　矢を　一つに　あつめ　て　之を　一同

に　折て見よ　と　申されました　から　かわる　〳〵　折て　見よう
と　いたされ　ました　が　なか〳〵　をれませぬ　ろれを　元就公
が　見て　イヤ　折れずば　折るに　及ばぬ　が　よく考へて　見よ
一本づゝ　折れば　容易に　折れる　が　一しよ　に　あつめ　たら　折
がたい　これも　同じこと　で　汝等兄弟　が　めい〳〵　吾家を　良
く　しやう　と　思へば　心が　はなれ〳〵　に　なり　丁度　一本の
矢　も　れなじ　こと　に　なり　じき　に　折れる　が　兄弟心を合
せ　合体して　助合ふ　ように　せば　一緒にあつめた　矢　の　よう
に　たやすく　折ること　は　できぬ　から　この事を　よく　考へ
我なきあと　にも　心得て　置けよ　と　申されました　まことに
何でもない　ような　ことで　兄弟中よく　する　と　いふこと　は
あたりまへ　じや　云はい　でも　聞かい　でも知て居る　と　いふ御
方も　ございましやう　が　ろの　あたりまへ　の　ことを　能く　す

る人が すくないのは妙です なるほど 幼少なときから一軒の家に 一所に 居ますから 中ようなければ ならぬ はつですが 各自に 妻をもち 夫をもち 子をもつ ようになりますれば 吾家大事と 思ひ よく心を たこします から すむ とか すまぬ とか 何したのが あるい とか いつも ごた〳〵 けんくわ を はじめます ッシテ ろの けんくわ の はじまり は よく と 欲の 衝突で 弟さんか 來られた とき 母はんか 何を かくして やつた とか 兄が くれた 分けまへ が 少いと か 何とか かとか いふより はじまる の です 實に 心得かた の まちがふた こと です 兄弟は 手の指の ようで 拇指かけがする か 人指しゆび を けがして ごらん ろの けがした指だけ 不自由する の では ございませぬ 外の四本は 勿論手まで 不自由 いたします 弟が なんぎすれば 兄も ともに な

んぎ せねば なりません はつ です ろれに 弟のたのみ といへば あぶや 蜂を 拂ふように いたします のは 吾身さへ なんぎ が なければ ろれで よろしい と いふような 勝手な心を 持て居る からです しかし 兄は兄 弟は弟 と べつ〳〵 に して れもひ〳〵 に してれく ことが 出來ない ことが ありまして まこと に いやな事 です が 弟とか 兄とか の中 に わるい病が 來ましたら どうで ございましやう あの人の 兄弟に わるい病が 出てある と いふて 縁組さへ して くれません して見ますれば 兄弟 めい〳〵 勝手なこと ばかり いふても 居られぬ では ございません か 『兄弟は 他人のはじまり』 といふは 吾々御互に 人の道を をさめ 神のをしへ を まもるものは 決して信すべき諺で ございません が どうも 事實が ろれに ちがひない と いふ 証據を みせてくれる のは まこと に な

げかはしいことです　頼朝公が　弟を　ろねみ　うたがひ　まして
義經を逐ふたり　範頼を　ころしたり　して　これで　吾家も　大丈
夫じや　安心じや　と　思ふて　居ましたが　わろか　三代で　はろび
ました　これと　いふも　兄弟中が　わるか　りし　もへ　かゝと　思
ひます　よく　御考を　ねがひたい　ものです

○兄は弟をいたはるべし

兄の身分として　家につたはる　財産を　父の　譲じや　からといい
ふて　弟に　やります　は　兄たるものゝ　せねば　ならぬ　ことで
弟に　しんだい　を　よく　分けてやつた　エヲイ人じや　と　申して
はめる　わけでも　ございません　しかるに　總領は　れやの跡目
を　相續する　ものじや　といふて　家につたはる　やゝさい　かざ
い　申すに　及ばず　田畑山林　なにもかも　皆吾物に　して　わけて
やらず　一人前の　しこみをして　やつた　とか　何を　どうして

やつた　とか　道理でもない事　道理らしく　つまらぬ事を　りくつら
しく　いひます人　が　ございます　が　こんな人は　犬や猫も　同然
じやろう　と　思ひます　作州の人に　甲田某と　いふものが　ございり
ましたが　ろの弟は　醫者を業と　して　居りましたが　修業中の
入用は　大方　助勢して　やりました　或時　某は　ろの弟に　田地
を　何程か　分けて　やらふ　と　申ました　ところが　弟は　ことわ
りまして　申すに　私は　わかげで　醫者となり　幸にも　うへも凍
へも　しません　のは　みな　兄上様の　わかげ　と　申す　もの
ろれに　又　このように　田畑山林　分けて　いたゞき　ましては
すみませぬ　どうして〳〵　受けられやうか　と　申ます　と　某は
申ますに　弟を　世話するのは　兄のやく　と　いふもの　ろのうへ
この田や　畑や　山林は　父上から　下さつた　もの　この兄　ひと
りに　下された　のでは　ない　から　どうぞ　取てれいて　下

されろうでないと死なれた父上に申分がないといふてむりに興へました弟も一旦は否みましたが兄が達てのすゝめに止むを得ずもらひましたがわが子は歴然とあるのに兄の子をもらひ受けかの田地山林とまだ外に田さへ少し買ふて農業をさせました といふことがございますまことにこの兄弟兄といひ弟といひ何とも申様なきよき心がけの人でございませんかわたくしの村には弟や妹に目鼻もつけてやらずふたりながら奉公に出して自分ひとり楽ようゐいぐわにくらし父祖傳來の財産をだきこんでわがみひとりのものとして居るものがございますこんな人は人の形ころしてゐれ人とは申されませぬたしかに富性同然でございます誰方様も兄弟なかよくうちやわらぎ一家一族の繁昌を御祈なさいませ

誠敬訓蒙

敬神道之話畢

明治二十七年十一月九日印刷
同　年十一月十五日發行　　定價金十錢

編輯兼發行者　奈良縣大和國山邊郡丹波市町大字三島　今村熊太郎
同　仝　添上郡帶解村　木原保吉
印刷者　大阪市東區南久寶寺町四丁目廿一番屋敷　岡島幸次郎
大賣捌所　大和國山邊郡丹波市町三島天理教會所御門前　高井書店
同　大阪市南區玉屋町　名倉昭文館
同　同　心齋橋順慶町　矢島誠進堂
同　矢島誠進堂

版權所有

賣捌所
大和奈良　阪田書店　仝　辻本書店
仝　後藤書店　仝郡山　小島文明堂　仝　豐住書店
仝帶解　井入保定吉　仝　森川米三郎　仝　宮澤書店
櫻井外山　和田ハル　仝　平井茂